



一人であり、その卓越した知性を現実政治の世界でも遺憾なく発揮した。ビルマルク期からヴィルヘルム期へと移り、ドイツ国民国家が国際権力政治の組織主体としての活力を喪失しているように思われることについて、ヴェーバーは燃えるような憂慮の念を抱いた。ヴェーバーのみるところその原因は、ビスマルク退陣後の指導者気質を有する政治家の欠乏、政治と学問とを蝕む「官僚制」化の進展、経済的基盤を失って私利私欲に走るユンカーの特権的支配、過去に満足して目標を見失っている市民階級、ディレタント君主の愚行、弱者への憐憫に夢中で権力闘争の現実を正視しない平和主義者たちの跋扈であるように思われた。こうした停滞ぶりに渴を入れドイツ国民国家を再び国際権力政治における生き生きとした闘争主体にするために、ヴェーバーが示唆したのが西欧、特にアングロ＝サクソン圏における人間の自由闊達な生活様式である。ヴェーバーの同時代人をみれば明らかのように、アングロ＝サクソン圏はドイツ自由主義陣営の政治的論客にとっては憧憬の対象であることがしばしばであったが、ヴェーバーの場合には親類縁者がイギリス、アメリカ合衆国に多くいるという追加的事情もあった。ヴェーバーのアングロ＝サクソン圏に対する強い興味、憧憬、劣等感、一九〇四年のアメリカ旅行によって決定的に増幅された。第一次世界戦争でヴェーバーがアメリカの参戦を極端に恐れたのは、彼がアメリカの潜在力を非常に高く評価していたことと密接に結びついている。ただ注意しなければならないのは、ヴェーバーは単純にアングロ＝サクソン圏を憧憬していたわけではなく、同時に多くのドイツ人同胞と同じようなアングロ＝サクソン圏に対する違和感にも満たされていたということである。ヴェーバーもまたイギリス海上帝国の世界支配に不公正なものを感じ、ドイツの海外進出を（少なくとも観念的には）熱心に望んでいたし、リベラル・デモクラシーの理念を振りかざして国際権力政治に割って入ろうとするアメリカ大統領ウッドロウ・ウィルソンの高圧的な道徳主義には強い違和感を抱いていた。強い憧憬を感じながら、そこに文字通り没入することは出来ないでいるというのが、ヴェーバーのアングロ＝サクソン圏に対する態度だったのである。

西欧に対して愛憎半ばするヴェーバーは、東欧の政治勢力に対してもまた別な意味で両義的な姿勢で臨んでいる。ヴェーバーにとって東欧における最大の問題はロシアとドイツとの角逐である。前年のロシア第一革命を踏まえて一九〇六年に書かれたロシア政治分析において、専制政治と農村共同体とを基盤とする後進国ロシアが非常な困難を抱えつつも、（ドイツを含む）西欧の政治理念の洗礼を受けて徐々に変化しつつあると認識したヴェーバーは、ドイツの自由主義知識人として改革の先頭に立つロシアの同志たちに共感し、官僚制という新しい武器をもってこれを弾圧しようとする皇帝政府に激しい憎悪を燃やしている。しかしヴェーバーはドイツ・ナショナリストとして、ロシアが西欧化によってその列強としての実力を増大させるのを危惧した。人間改革による国力増大に注目するヴェーバーは、ドイツが西欧化によって国力を増大させるように、ロシアも西欧化によって国力を増大させることに一抹の不安を覚えたのである。「ロシアの脅威」に対するヴェーバーの

不安が爆発するのが第一次世界戦争で、それは一九一七年の二度に亙るロシア革命を通じても全く払拭されなかった。こうしたヴェーバーのロシア観との関連で興味深いのが、彼の生涯に亙るポーランド問題に対する取り組みである。そもそもヴェーバーが政治評論家として初めて世に知られるようになったのは、彼が社会政策学会でポーランド人農業労働者がドイツ東部に拡大することを警告したときのことであった。ヴェーバーはポーランド人農業労働者という彼のみるところ「文化」の低い人間たちがドイツ国境を越えて侵入し、ドイツ人農民たちの仕事を奪っていくという事態に我慢が出来なかったのである。ヴェーバーはこの活動の一環として、全ドイツ連盟やドイツ・オストマルク協会といったドイツ・ナショナリズム煽動団体に加入し、論客としての頭角を現すことになる。ところが一九〇六年にロシア政治分析に従事するようになり、ロシア国内のポーランド人がその文化的自治の代償としてロシアと連合する気配があることを知るや否や、ヴェーバーはポーランド人農業労働者排除論を撤回しないまま、同時にプロイセン領内のポーランド人に文化的自治を与えることを要求するようになる。第一次世界戦争でロシアの脅威が深刻なものになると、ヴェーバーのポーランド人との和解要求はより真剣なものになっていく。ところが敗戦によってポーランド独立国家が誕生し、その領土要求がドイツ東部のポーランド人居住地域に及びようになると、ヴェーバーのポーランド人に対する態度は急速に硬化したのである。

結局ヴェーバーの五十四年の生涯を概観してみえてくるのは、彼の西欧志向によってそのドイツ・ナショナリストとしての苦悩が深まったということである。ヴェーバーは西欧・ドイツ・東方という序列意識を強烈に意識しており、その上でドイツが西欧諸国に倣い西欧諸国と同様に世界の「名士民族 [Herrenvolk]」の一角を占めることを強く望んだのである。しかしドイツ人としての自尊心もあるヴェーバーはそうした西欧諸国のありかたに没入することは出来なかったし、第一次世界戦争になるとヴェーバーが西欧列強がドイツを自分たちの仲間から排除しようとする光景に遭遇し憤激した。ドイツの「名士民族」への昇格に躍起なヴェーバーが、ドイツ人よりもその理想に遠いようにみえたポーランドやロシアなどの諸民族に非常に冷淡にならざるを得なかったというのは、悲劇的なことではあるが驚くには当たらないことなのであった。